

『パンプキン』2011年4月号

ハッピーロード 希望の光 歓びの詩

第2回 人生をデザインする——仕事と夢と家庭

池田大作（創価学会インタナショナル会長）

さくら さくら
心の中まで咲く さくら
嬉しや嬉しや 春來たる
心の世界に咲く さくら

桜の花言葉には「心の美」とあります。皆の心を明るく照らして、笑顔にさせる不思議な力を持っています。

あの戦争中、焼け野原に生き残って、けなげに咲く桜が、どれほど人々を励ましてくれたか。

桜は平和の象徴です。いつか、日本中の駅に桜の木を植えて、皆の心を晴れやかにしたい——これが、少年の日に私が抱いた夢の一つでした。

昨年、生まれた女の子の命名で最も多かったのは「さくら」だと聞きました（※1）。わが娘の幸福満開の人生を願ってやまない、いつの世にも変わらざる親心が伝わってくるようです。

もともと、「さくら」という名前それ自体に、「咲く」というひたむきな意志が宿っています。

それは、逆境にあろうとも、希望の花、勝利の花を咲かせてみせるという、女性たちの毅然たる決意と響き合っているのではないのでしょうか。

燃えるような情熱で青春時代を駆け抜けた明治の作家・樋口一葉は語っています。「何もしないで一生を終えてよいのでしょうか。何をなすべきかを考え、その道をひたすら進んで行くだけです」（※2）と。

どんな人にも、どんな時代を生きようとも、その人には、その人にしか歩めない人生の道があります。

「志」という味わい深い言葉があります。「こころざし」は「まなざし」と同じ成り立ちで、心がまっすぐに見つめて目指す所のことです。

ありのままの心の発露でいい。たとえ、ささやかに見える目標でも、そこに近づこうと

努力することが、自分にしか歩めない充実の道です。

人を羨む必要など、まったくくない。わが人生を心楽しくデザインして、自分らしく力の限り創り上げていく。その喜びと誇りは、誰にも奪うことはできません。

桜は 桜の使命で 咲く

貴女は 貴女の使命で 生き抜け

真剣に一筋に心を定めた女性が、どれほど気高く、どれほど強いのか。

「アメリカの人権の母」ローザ・パークスさんは、アラバマ州の州都モンゴメリーのデパートで、服の仕立ての仕事をしている婦人でした。その胸には、お母さんから受け継いだ「自由」と「平等」の世界への夢が、いつも光っていたといいます。

一九五五年の十二月一日、パークスさんは、仕事の帰りに乗ったバスで、非道な人種差別に遭い、決然と抗議の声をあげました。四十二歳の婦人の勇敢なる一歩から、歴史に輝くバス・ボイコット運動が始まったのです。民衆の非暴力の団結は、いかなる圧迫にも屈せず、ついに一年後、“バスの人種隔離は憲法違反”という合衆国最高裁判所の判決を勝ち取りました。

パークスさんは、一生涯、人類の平等と繁栄を夢見て、行動を続けておられました。

「もっと自分の活動範囲を広げたい」(※3)

「私の一番の“趣味”は、若者たちと一緒に働くこと、若者の手助けをすることです」と。

私が創立したアメリカ創価大学にも、日本の創価大学にも、来ていただきました。パークスさんを囲んで大合唱した「ウィ・シャル・オーバーカム(私たちは必ず勝利する)」の歌も、心から離れません。夢に向かって、恐れなく一歩を踏み出す勇気を持つこと——この慈母が乙女たちに教えてくれた「ハッピーロードの哲学」です。

今に見よ

花の王者の

桜かな

少子高齢社会の現在、日本の労働力人口の総数は減っています。しかし、その中にあって、女性の労働力人口は増える方向性にあります(※4)。

女性の知恵が生き生きと発揮されればされるほど、職場であれ、地域であれ、創造性が漲り、調和が図られていく。新たな社会の希望の活力は、女性のソフト・パワーにあります。

そのためにも、女性たちが安心して伸びやかに働くことができる環境を、さらにさらに整備していかなければなりません。

女性の夢は、足もとが危うい男性の夢想と違って、大地に根差して現実的です。それだけに、夢と現実との間で悩み、苦しむことも多いでしょう。

そもそも、自分が夢に描いた通りの仕事や進路にはならないことが、厳しき現実かもしれません。

志望と異なり、意に沿わない仕事をする。そうした職業の悩みをもった青年を、私の恩師・戸田城聖先生は、よく励まされました。

「決してへこたれるな！ 今の使命の場でベストを尽くしてごらん。『なくてはならない人』を目指すことだ。そこから大きく開けるよ」と。

人生には「自分がやりたいこと」がある。また「自分がやらねばならないこと」もある。そして「自分でなければできないこと」がある。

「夢」と「責任」と「使命」を見つめながら、まず「今、自分ができること」を誠実にやり抜き、粘り強く創意工夫を重ねていく。その中でこそ、これまで気づけなかった自身の才能や可能性が開発される。そこに、現実に根を張り、確かな幸福勝利の花を咲かせゆく道があるのではないのでしょうか。

私の妻も女学校を卒業する際、進路に迷いました。医師や薬剤師への志望もあったようですが、家庭の経済的な面も考慮し、銀行に就職しました。忙しい毎日でしたが、あまり得意ではなかった算盤を特訓したり、「今日のことは今日やる」という職場の習慣を身につけたりしたことが、今でも役に立っていますと、微笑みながら振り返っています。

速記も学んでいたもので、私が体調を崩しペンを握れない時は、新聞連載の口述などを筆記してくれました。

中国の周恩来総理との会見には、総理のお体を案じて少人数で臨んだため、記者も同席しませんでした。この語らいの内容をメモして記録に留めてくれたのは、妻です。

君立ちて

ひとりの桜に

万の花

二十五年前の桜花薫る四月、私と妻は東京・小平の会館を訪問しました。たまたま居合わせたのは、育児や家事に、地域の活動に、それはそれは目まぐるしい日々を送るヤング・ミセスの皆さんでした。

私は少しでも励ましになればと申し上げました。

「太陽も、毎日毎日が同じ繰り返しです。しかし、生きとし生けるものすべてに慈光を贈り、育んでくれる。平凡と思える日々の生活、行動の中にのみ、真実の幸福は築かれていくのです」

時として華やかな脚光を浴びている人と比べて、現実に追われる自分の姿に落ち込むこともあるかもしれない。けれども、虚栄や見栄など、一時の幻に過ぎません。平凡こそ偉

大です。地道こそ勝利です。

大事なことは、自分らしく幸福に輝くことであり、皆を幸福に輝かせていくことです。

アメリカの作家エレナ・ポーターは、「縁の下の力持ち」の女性を讃えながら言いました。「人から必要とされることほど有意義なことはありません」「いちばんの幸福は人に頼られ、人から求められることです」(※5)

島根県の城下町に、妻もよく知る熟練の女性デザイナーがいます。お子さんの大病やご主人との死別など、幾多の苦難を乗り越えながら、市の連合婦人会の役員として地域に貢献し、八十余歳の今も、潑刺と活躍されています。

各家庭の箆笥の中で眠っていた形見の反物や成人式の振り袖等を、ドレスやスーツに仕立て直して蘇らせるリサイクル(再生利用)ファッションも手がけ、地域に大きな喜びを広げています。

「リフォーム(仕立て直し)は、人生の苦楽のすべてに意味を見出し、前へ前へと勝ち進む“原動力”に変える生き方に似ていますね」と笑顔が清々しい。

仏典には、「心は工(たくみ)なる画師(えし)の如し」とあります。人生のデザインは、いつでも自分の心で決まる。ゆえに、強く賢き心があれば、何があっても行き詰まらない。自在の知恵で現実の素材をたくみに活かして、一日一日、手作りの生活の名画を描いているのです。

来る年来る春、試練の厳寒を越え、桜花のように喜びの勝鬨(かちどき)をあげながら、偉大な夢に朗らかに生き抜いていきたい。そこにこそ、皆に慕われ、皆の心に生き続けていく人生の四季の絵巻があるのではないのでしょうか。

爛漫(らんまん)と
貴女(あなた)の前途の
桜かな

追記 「東北地方太平洋沖地震」により被災された方々に心からお見舞い申し上げます。苦難からの変毒為薬の復興を真剣に祈っております。(三月十一日)

- ※1 明治安田生命による生まれ年別の名前調査を参照
- ※2 『完全現代語訳 樋口一葉日記』(高橋和彦訳)アドレエー
- ※3 『勇気と希望』(グレゴリー・J・リード協力、高橋朋子訳)サイマル出版会
- ※4 総務省「労働力調査」を参照
- ※5 『スウ姉さん』(村岡花子訳)角川書店